the noblesse of beauty

～美容業界の未来へ気高く生きる～

美容の可能性を追求する「半田まゆみ」というつむじ風

「髪の毛って何だろう？」――そんな素朴な疑問から、髪の毛の民族文化や歴史、さらにはアートの世界をめぐる、長い長い冒険を続けている半田まゆみさん。阪神大震災で父親を亡くし、急遽美容学校の跡を継ぐこととなったが、トレードマークの丸刈りを引っさげて、ヘアとアートの融合＝「ヘアラルト」を学生たちに伝えている。
そんな半田さんを「生き様自体がアート」と評する横田敏一氏が、対談を通して美容の大いなる可能性を探り出す。

第9回ゲスト　半田まゆみさん（ヘアラルト阪神理容美容専門学校理事長）

profile

半田まゆみ（はんだ・まゆみ）

1962（昭和37）年	兵庫県尼崎市生まれ。
1986（昭和61）年	関西学院大学法学部卒業。阪神理容美容専修学校卒業。
1987（昭和62）年	美容師免許取得。
1988（昭和63）年	現代美術家の嶋本昭三氏に師事し、ヘアと現代美術の融合をテーマとした研究・発表を始める。
1989（平成元）年	デニス・パンクス氏と出会い、インディアン・ヘアを伝授される。
1995（平成7）年	阪神理容美容専修学校理事長に就任。1997（平成9）年から、学校の愛称として「ヘアラルト」を掲げ、今までにない学校づくりを進めている。

私、髪の毛が大好きなんです！

横田敏一（以下：**横田**）　半田まゆみ先生との出会いは、私達が主宰している『横田富佐子杯ブライダルコンテスト』に来ていただいたのがきっかけではないかと思いますが、半田先生自身がとても印象的な方ですし、再会の機会があればと思っていたところ、今日こうしてお会いすることができて、大変うれしいです。

半田まゆみ（以下：**半田**）　こちらこそ、いつも横田社長の記事を読んでいますので、対談相手に選んでいただいてうれしく思っています。

横田　ありがとうございます。さて、半田先生との対談に備え、執筆された本や記事などを読んで予習してきました。最初に出版されたのが「丸刈り奮戦中」（たま出版刊）ですね。

半田　平成9年の発刊です。阪神大震災後、急遽私が理事長になってからのことも、ここに書いています。

横田　『私らしくしあわせになる方法』（新風舎刊）を出されたのが2年前。そして最新の本が『髪のコードを読む』（小社刊）。

半田　『髪のコードを読む』は昨年10月に出たばかりです。

横田　それは宣伝しなくちゃ！

半田　いろんな民族の、ヘアに関する文化やヘアスタイルの歴史などを、私なりの視点でとらえて『HAIR MODE』誌で3年弱ほど連載したのですが、それを1冊の本にまとめたのがこの本です。

横田　読んでみて、ここまで髪から世界が広がるのかと感動しました。

半田　美容師さんは皆そうだと思いますが、私も、髪の毛が大好きなんです。女性の美しい髪の毛だけではなく、床に落ちた髪の毛の気持ち悪さとかも含めて好きなんですよ。

横田　それだけ髪の毛に深い興味を

持っているということですね。実は私も、歴史が好きなものですから、24年前に美容の技術書を出したとき、その3分の1ぐらいは、当時のヘスタイルが歴史的な面でどのような背景を持っていたのかについて、資料を漁って自分なりにコメントを書いんたんです。それが『オールラウンド・ヘア』(小社刊)という本で。

半田　(中身を見ながら)これは素晴らしい！　よく調べられましたね。

横田　ところがあんまり売れなくて(笑い)。

半田　いい本なのにもったいない！

横田　青春時代の思い出です。

半田　自分がやったから…ということではありませんが、このような視点も、美容業界としては必要だと思っています。どんな業界であっても、いろんな立場や視点が複合的に組み合わさってこそ、健全に発展するのではないかと思っていますから。

「髪の毛って何だろう？」

横田　半田先生は、ヘアラルトの理事長に就任される前は、ヘアを切り口としたアートやカルチャーの世界に身を置いていましたね。

半田　親からは、後を継いで云々とは言われていませんでしたが、大学を卒業した後美容師の免許を取って、自らこの業界に飛び込みました。そして、そのころから、「髪の毛って何だろう？」「どうして人は髪を切るんだろうか」ということをずっと考えていたんです。

横田　非常に根源的な疑問ですね。

半田　日本であれば、ファッションの一部とか、イメージチェンジとかいったきっかけで髪を切りますが、さまざまな民族や歴史を調べるうちに、「髪」というものがいろんな意味を持っていると知って、さらに興味を覚えたんです。ちょうど当時は美容業界に反発を感じていて、「大学を卒業するとき、企業で言われた仕事をするよりも、もっと何かを創り出すような仕事がしたいと思って美容師になったのに、毎日同じ仕事じゃないか」と思ったんですね。

横田　そのことが、ヘアから見たカルチャーやアートの分野に進まれるきっかけになったわけですね？

半田　今になれば、どんな職種であっても毎日の繰り返しから大きな変化を生み出し、創造していくということが理解できるのですが、当時はそれがわからなくて、手っ取り早く何か新しいことがしたいと思いました。美容でいうと、技術面は進んでいますが、アートという視点と、髪の毛そのものを民俗学的・歴史学的に探究するという方向がなかったので、ならば私がやってみよう！と。

横田　美容業界に身を置く人は、美容師としての技術やヘアデザイン、サロン経営といったことを中心に考えますからね。周囲からは異分子として見られたのではありませんか？

半田　何か美容の新しい道を探りたいという思いがありましたから、逆にそう見られたことで、この方面に行きやすかったとも思います。むしろ、他にやっている人がいないから私ができるんだ！というぐらいの気持ちでしたね。

髪を通して表現できること

横田　そして、ネイティブアメリカンの指導者、デニス・バンクスさんと知り合い、トレードマークの丸刈りにされました。

半田　いろんな民族のヘアスタイルを調べているとき、ちょうどネイティブアメリカンの写真集を見たのですが、彼らは男性であっても、みんなロングヘアで三つ編みなんですね。それこそ横田社長ぐらいの長老といわれるような人達も…、

横田　ちょ、ちょっと！　僕はもうおじいさんですか(笑い)。

半田　ネイティブアメリカンの世界では、50歳を過ぎたら、若い人達に教えを説いていく役割をする長老ですからね。すると、当然の疑問ですが、「何でこんなオジサンたちが、三つ編みなのかな？」と思ったんです。日本で、父親の世代が三つ編みだったら笑っちゃいますよね。そこから興味を持って、アメリカ領事館などにも足を運んで、髪の毛に関する資料を調べていったのですが…。

横田　僕も髪の文化や歴史について調べたことがあるのでわかりますが、髪の毛に関する独立した資料って、ないんですよね。

半田　そうなんです。そのとき、私、美容という世界がないがしろにされているみたいに感じて悔しくて。それで、もっと調べたいと思っていたとき、デニス・バンクスさんの『聖なる魂』(朝日新聞社刊)という本が、日本でノンフィクション大賞を受賞して、記念講演のために来日することを知ったんです。「この人に会えば、ネイティブアメリカンの髪について、何か聞けるかもしれない」と思ったのですが、でも、講演会を聴きに行くだけでは、直接対話することはできないじゃないですか。

横田　確かにそうですね。

半田　そのとき思い付いたのが、イ

ナビゲーター横田敏一さん
(株ビューティ横田代表取締役社長)

profile

1948(昭和23)年5月、美容家・横田富佐子女史の長男として生まれる。東京都出身。
都立日比谷高校卒業後、慶應義塾大学経済学部に進学、一方で美容師免許を取得する。
株ビューティ横田に入社後、技術から経営まで幅広く手がけ、同社専務取締役を務めた後、2000(平成12)年、同社代表取締役社長に就任した。
現在はブライダルの装い協会理事長、横田富佐子美容文化会副会長を務める一方、インターコワフュール ジャパン理事・幹事、美協NHDK(日本ヘアデザイン協会)理事(学芸文教・国際プロジェクト委員長)、東京都美容訓練協会会長等、業界有力団体の要職に就く。
1989(平成元)年には全国美容週間運動の第11代実行委員長、1993(平成5)年には美容界内閣総理大臣の役を担い、業界繁栄に向けてのリーダーシップを執った。

ンタビューという方法です。私も取材を受けたことがあったので思い付いたのですが、インタビューなら初対面でもいろんな考えを語りますものね。それで、知り合いが編集長をしているタウン誌のインタビュアーとして、取材させてもらいました。

横田　そこに気付いて即行動されるところが半田まゆみ流です。

半田　それで、デニス・パンクスさんの取材を終えて、「きれいですね」と髪の毛に触ろうとしたら、直前まで優しかったのが一転、「触ってはいけない!」と厳しく言われたんです。なぜなら、髪の毛は神聖なものだから、初対面の人になど触らせない、ということなんです。日本の美容室だったら営業になりませんよね。

横田　それはカルチャーショックだったのでは?

半田　そうなんですよ。この人達の考え方は何だ?!と興味を持って、通訳のボランティアを名乗り出ました。そして、通訳をしながら、髪の毛の歴史や文化を訊ねたりして交流しているうちに、ある日、髪の毛を触らせてくれたんです。自分の髪の毛を使い、自ら伝統的な編み方を私に教えてくれました。

横田　半田先生を信頼したからこそ、髪に触ることを許したわけですね。そして、カナダで髪の毛を剃るパフォーマンスをされました。

半田　ネイティブアメリカンの教えを伝え、平和を祈るために走る『セイクリッド・ラン』という運動があって、ヨーロッパを走ったときは私も参加しました。そして、翌年はカナダを横断することになったのですが、ロッキー山脈を横断するから危険だということで、私の参加は認められなかったんです。でも、私もランのために何かしたいという思いがあって、ならばオープニングのセレモニーで、「女の命」と言われる髪の毛を捧げようと決意しました。

横田　もう15年も丸刈りですね。

半田　本当は後で伸ばすつもりだったのですが、このパフォーマンスがアメリカで記事になって、それを見た人から、今度は私に頭を剃ってほしいという人が現れまして…。約1ヵ月の間に、6人の髪の毛を剃るパフォーマンスをしたので、これがトレードマークになっちゃって。

横田　当時はお父様(故・半田健三氏)も健在でした。自由な発想や行動を認めてもらえるという意味では、開放的な家庭だったのでしょうか。

半田　いえいえ、頭を剃ったときは、父に勘当されました。

横田・半田　アハハハハ。

横田　半田先生にとってもう一つの転機となったのが、前衛美術の世界で活躍されている、嶋本昭三さんとの出会いですね。

半田　嶋本先生は、「ヨーロッパのアートに日本の芸術が影響を与えたのは、浮世絵と具体美術である」とまで言われた具体(ぐたい)美術協会の創設メンバーで、世界的にも有名な先生なのですが、たまたま私と同じ市に住んでいて、同じ大学の先輩だったということで偶然知り合いました。嶋本先生も私のことに興味を持ってくれて、「もっと髪の毛って自由に表現できるよ」というアドバイスをいただいたんです。それからですね、ヘアを通じたアート表現をしてみようーと思うようになったのは。

横田　かなりアバンギャルドなことをされていますね。

半田　私の顔写真を原寸大にコピーし、「自由な発想で、ここにヘアスタイルを描いてください」と添えて、国内・国外問わず、いろんな方に送ったんですよ。そうして返事がきたものを展覧会に発表したところ、メール(ポ)アートとして前衛美術の世界で賞をいただいたほか、海外の美術館で企画展示していただいたり、招待を受けたりしました。

学生たちの将来のためにいま私は働いているんだ

横田　そうしてアートの分野で活躍していたところ、1995年の阪神大震災でお父様を亡くされるというご不幸を経験されて、阪神理容美容専修学校の理事長に就任されました。周囲の反応はいかがでしたか?

半田　卒業生の中には、私のような異端児が学校に舞い戻ってきて、どうなるんだ?!という不安を持った方

もいましたが、逆に、応援するよ、と言ってくれる方もいたことが、励みになりました。

横田　学校経営に携わるようになって10年以上になりますが、良かったと感じることは何ですか？

半田　何といっても、多くの学生達に会えたこと、そして、その子達に私のエッセンスを注ぎ込めて、同じ美容業界人として活躍し、将来を担ってくれている、ということです。ちょっと疲れているときでも「おはようございます！」「さようなら」とあいさつしてくれる学生達の元気な顔を見たら「あ、この子達の将来のために、今私は働いているんだな」と実感できて、エネルギーとなります。それが一番大きな喜びですね。

横田　逆に、苦労したことは。

半田　あまり苦労をじっくり考えないタイプなんで（笑い）。…でも、一番苦労したことというのはやはり、震災直後でしょうね。あのときは、それこそ経営ということすら、何もわかっていませんでしたから。

横田　学校の書類を探すために家を解体したそうですね。1週間待てば半額になるけれど、とても待てないので、すぐに解体を依頼されたとか。

半田　最初の給料を出すときは大変でした。給料日は迫ってくるし、職員も被災して困っているからお金を出さないとならないし、でも理事長印を押せないから引き出せなくて。

ですが、あのときは神戸の人達みんなに不思議なパワーがあったんです。火事場の馬鹿力みたいなね。それがあったから困難を乗り切ることができたのだろう、と思います。

横田　4つ違いの弟さんで、校長をされている一朗さんとのコンビプレーで乗り切ったわけですね。

半田　弟にも周りの方にもだいぶ助けてもらいました。だからあのときは、大変には違いありませんが、苦労とは思っていませんでした。

まゆみセンセー流・人生の発想術

横田　理事長就任から3年後の平成10年には、美容学校が2年制へと移行しましたね。このことで、各学校の独自性がカリキュラムの中に反映できるようになったのでしょうか。

半田　1年制のときは、どうしても国家試験のためだけのカリキュラムにならざるを得ませんでした。それが2年制になったことで、選択科目などを通して学校の教育方針を反映させやすくなりましたから、私としては、自分の教育したいことを進めやすいシステムになりましたね。

横田　同時に『ヘアラルト』という愛称も知られるようになりました。

半田　『ヘアラルト』という名称は、理事長になる前から作っていて、自分の会合などには使っていたのですが、理事長に就任して、新しく学校のアイデンティティを確立しようと考えたとき、その象徴となるブランドネームとしては、やはりこれが一番ぴったりはまると思ったんです。

横田　この愛称が定着したのも、学校が半田まゆみ流に変わり、『ヘアラルト』という名前に合っているからだと思いますが、ここに込められた思いを教えていただけますか。

半田　単にヘアデザインがアートというよりも、ヘアという舞台を自分の人生に選び、自分の手で自分の人生を作っていくということ…、そのこと自体がアートなんだよ、というコンセプトです。ですから、美容という職業を通して自分自身を表現することが、いかに気持ち良いのかを知ってほしいと思いますし、学校にいる間に、自分らしさにも気付いてほしい、という思いも込めています。

学校のカリキュラムでも、もちろん国家試験の対策のようなベーシックな部分もありますが、比較的アートの授業を取り入れています。

横田　アートの授業というと、具体

新規顧客開拓
◆デッサンとメイクアップ導入で他店と差別化！
◆まつ毛カールを切り口に再来店客数を増やします。
◆◆ Total Beautyのお手伝い ◆◆
随時募集中
・化粧品の商材コーディネート、メイクメニューの立案、アーティスト派遣。
・理論に基づいた眉カット、メイクアップをメニュー化し、単価アップを図ります。
◎美眉コース(眉カット・眉脱毛・眉ブリーチ)
◎まつ毛カールコース
◎ブライダルコース(ヘアー・メイク・着付け)
・サロンメイクアップコース　・ヘアーデッサンコース
・ファンタジーメイクアップコース
(ヘナアート・ボディペインティング・エアーブラシ・特殊メイク)
・ネイルコース　・アートメイク
◆各コース　ディプロマ発行します◆
◆主な取扱いブランド　MAKE UP FOR EVER　shu uemura　CHACOTTO　BEN NYE　Raphael　TEMPUTU　KRYOLAN　三善　ATELIER RAISIN　SAFETY
デッサン　福田隆彦
Make-up Salon/Pro Shop/School
ATELIER RAISIN
〒150-0034 東京都渋谷区代官山町12-18 第2INOビル3F
TEL 03-3464-7897 FAX 03-3464-7997
営業時間 am10:30～pm7:30　定休日 毎週水曜日

的にはどのようなものですか？

半田　一番の特徴は、私の担当している「発想論」という授業で、これはどの美容専門学校でもやっていないものです。おおげさに言えば、ヘアデザインだけでなく、人生の発想力を鍛えよう、ということですね。

横田　人生の発想力！　実に面白そうです。

半田　人生、つまずくこともあれば、壁にぶち当たることもあるけれど、そのときにヘコんでしまうのではなく、プラスの方向へ発想を転換し、ステップアップしていけるような人になってほしい、ということで、いろんな物の考え方を教えています。

横田　理事長自ら、教壇に立たれているのですか？

半田　はい。私自身も学生の名前を全員覚えていて、「○○ちゃん元気～」と声を掛けているのが、来校者からはびっくりされます。

横田　学生さんは半田先生のことを「まゆみセンセー」とか「まゆみちゃん」って呼ぶそうですね。

半田　小さな規模の学校ですから、伝統的に家庭的な雰囲気なんです。

横田　18歳人口が減少しているにも関わらず、美容学校の定員は増えていると聞きます。半田先生の学校は、半田まゆみという個性や学校の独自性が強く訴えられていると感じますから、入校生がいなくなる、といった心配はしていませんが…。

半田　いえいえ、苦労していますよ。大型校でも小規模校でも、知ってもらおうとする際に掛かる広告宣伝費は一緒ですから、規模に対する比率としては負担が大きいんですよね。

横田　美容学校の中では、いち早くウェブサイトを立ち上げられたそうですが、効果はいかがですか？

半田　特にここ2年は、「何で学校を知りましたか」というアンケートを取ると、「ウェブサイト」という答えの割合が上がってきています。

横田　学校や半田先生の紹介を見て、自分に合っていると思う子も多いのではないでしょうか。

半田　私が歩く広告塔みたいになっていますからね。

横田　今後、学校の独自性を打ち出す上で、何を続けていきたい、または変えていきたいと考えていますか。

半田　続けていくということでは、理事長という仕事を10年やってみて、継続する重みや大変さをひしひしと感じています。若いときは「何かお爺ちゃんの時代からやっているな」ぐらいの感覚でしたが（笑い）。

横田　僕もずっと専務をやっていて、いざ社長になったら、こんなに違うのかと思いました。社長も理事長も後がないから、全責任を取らなければいけませんものね。

半田　そうなんです。学校を閉じるのは、ある意味簡単です。でも、学生や卒業生にとって、母校が消えたら淋しいじゃないですか。だから、校風や伝統を守りながら、さらに良い学校にしていきたいと思います。

横田　学校として一番大事だと考えているのは、どんなことですか？

半田　国家試験の合格率や就職率も大事ですし、技術の修得も必要です。しかしそれよりも、学生という個人、人間を教育するということに重点を置きたいと思います。高校を卒業してから社会に巣立つまでの2年間という、一番大事な時代を預かるのですから、社会人としての物の考え方や気持ちのあり方をしっかり学んでくれたら、将来いろんな役に立つと思いますし、それができる学校でありたい、と強く思っています。

横田　そういう考え方がしっかりした卒業生というのは、サロンの経営者としても、とても興味があります。

半田　卒業生は、学校にとって大事な財産です。サロンさんや卒業生とは、就職先とのパイプ役だとか、また卒業生を雇っていただくという意味だけでなく、例えば一緒に研究会を企画するとか、コンテストやヘアショーを開催するといったことをやっていきたいと思います。

大きな視点で美容業を見てほしい

横田　半田先生も四十代半ばを迎え、今お伺いしたようなコンセプトやポリシーなどを、誰かに継がせていくようなことは考えていますか？

半田　今のところ自分が懸命にやっていますので、まだ具体的な構想は

ありませんが、教えることによって、エッセンスを残すことは大事だと考えています。

横田　もっとも、半田先生の話を伺っていると、あと50年は現役でいけるだろうというパワーを感じます。

半田　いやいや、そこまでは。ウッフッフ。

横田　男は早く死んでしまいますが、女性は長生きですから。母の横田富佐子も昭和2年生まれです。

半田　メイ牛山先生もいらっしゃいますし、美容業界の女性って皆さんお元気ですよね。

横田　メイ先生は今年で95歳ですね。「東のメイ牛山、西の半田まゆみ」と言われるようになってください。

半田　メイ先生とは、トークショーで対談させていただいたことがあるんですよ。もう、大好き！　おいくつになっても、「女はいつも美しく」と話されていて、本当に素晴らしい。

横田　そろそろ最後の質問となりますが、半田先生から見て、美容業界はどうお感じになりますか？

半田　美しくなることに対して、特に女性の願望はものすごく強いので、その願望を叶えるのが仕事ということは、素晴らしいと思います。でも、小さく固まらないでほしいとは感じます。美容室が多過ぎて、売上や指名客数が伸び悩んだり、という大変さはあるのでしょうけれど、自分のことばかりにとらわれるのではなく、大きな視点、例えば美容業界の中で、地域の中で、発展のために何かできることはないか、という意識で動いていけば、面白いのではないでしょうか。

横田　僕も、それはとても大事なことだと思っています。

今日は、半田先生がいろんな経験をされて、「半田まゆみ」というユニークな個性が生まれたことを知ることができました。これからも、美容業界の中で火を灯しながら、95歳、100歳までご活躍していただきたいと思います。

※1デニス・バンクス
1936年、アメリカ・ミネソタ州生まれ。1968年、AIM（アメリカ先住民の権利回復運動）に参加。その後、ネイティブアメリカンの教えを伝え、平和を願うという目的で大陸を行進・走破する「セイクリッド（聖なる）・ラン」活動を繰り広げている。1988年、日本で出版された「聖なる魂」が朝日ジャーナルノンフィクション大賞を受賞。

※2 具体美術協会
1954年、吉原治良氏を中心に結成された団体。従来の表現や素材という束縛を解放し、新しい美術作品を生み出した。

※3 メールアート
嶋本昭三氏によって創出されたアート表現で、郵便という制度を用いて、作品の交換や交流を行なうというもの。

off time　対談を終えて

失礼ながら、小柄な体のどこにあのエネルギーがあるんだろう、と誰もが思うはず。はち切れんばかりの笑顔にトレードマークの丸刈り頭。アグレッシブな人生経験ばかりかと思うと、あの阪神大震災でお父様を亡くされ、突然美容学校の経営を任されて途方に暮れるなど、大変な経験もなさっている。だがしかし、今のエネルギー・元気の素は、「まゆみセンセー」「まゆみちゃん」と屈託なく話しかけてくる学生さんたちからもらっているなど、人が大好き、美容師大好きがキーワードか？

その半生の中の、「アート、髪の毛大好き！」という思いから世界を股にかけ、走り回り駆け回ってその名を馳せた時期を過ぎ、学校教育とコミュニケーションを通して「美容業界に貢献できる“自分づくり”を頑張って」と学生さんたちにエールを送る半田さんを、心より応援したい。“まゆみちゃん、がんばって!!”

（横田敏一）

よいパーマはよいロッドの選定から
〝ニューエバー〟は信頼のブランド

製造元
ニューエバー理・美容プラスチック製品
安元化成株式会社
〒334-0013 埼玉県鳩ヶ谷市南6-15-2
TEL 048(284)7411(代)